

# 天沼小だより

文責

校長 大里 忠弘



## 6年3組 ぽちゃまる 物語



校舎の陰に、今年もツバメが巣を作り、子育てをしています。次々と雛が巣立ち、間もなく南の海へと飛び立つ頃です。日本で繁殖したツバメは、台湾を経由してフィリピンやマレーシアまで飛び、そこで冬を越すそうです。

7月になったある日、6年3組の男の子が、巣から落ちて命を落としてしまった雛を手、私にとりかえってきました。埋葬してあげたいのだが、どこか適当なところはあるかとのことでした。体育館の裏ならどうだろうかと答えると、友だち数人と連れだって体育館の裏へ行き、丁寧に埋葬してくれました。

彼らから詳しく話を聞くと、6年3組のベランダに一つあった巣が、長引く梅雨の影響で、湿気を含んでしまい、重さに耐えられず崩れてしまったらしいのです。彼らは、用務員の岡崎さんに相談し、箱を用意してもらい、体が冷えないようにティッシュなどを敷き詰めるなどできる限りのことをしてくれました。しかし、翌日には冷たくなってしまったというのです。

翌日の放課後、6年3組の男の子が一人、一度家に帰った後、学校に戻り、職員室へやってきました。ツバメの雛に餌をあげたいので校舎に入っていいかと言うのです。彼は、何かで調べたのでしょうか。食パンを水で濡らし、柔らかくすると雛が食べるはずだと言って、手に食パンを持っていました。私も一緒に6年3組のベランダに行きました。まだ毛の生え揃わぬ小さな雛が2羽、箱の中にうずくまっていた。崩れた巣にはまだ数羽の雛がおり、親鳥が餌を運んでいましたが、そのうちの2羽が巣から落ちてしまったのです。

彼が指でちぎった食パンを口元に近づけると、雛は大きく口を開けます。濡れたパンが指に張り付いてしまい、うまく口の中に入れられません。そばに落ちていた細い草枝の先にパンをつけ、再び近づけると、黄色い大きな口の中にすっぽりと落とすことができました。その後も、何口もパンにばくついていました。

上を見上げると、巣の中にはまだ別の雛がいるのか、声が聞こえます。落ちた雛を巣に戻すことも考えましたが、巣の端が崩れていて、うまく戻せそうにありません。戻せたとしても、人の手に触れた雛は、そのにおいを嫌うのか、親鳥が警戒して餌を食べさせてくれないとも聞きます。彼は、その後毎日、2羽の雛を家に連れ帰り、餌をあげてくれました。

訳あって、ツバメの雛に餌をあげた経験のある子が雛用の餌を持っていて、提供してくれました。しかし、愛情込めた介抱の甲斐もなく、雛は弱って命を落としてしまいました。

数日後、巣にいた残りの雛が、また落ちてしまいました。これまで親鳥に育てられた雛は、大分、羽が生えそろい、丸々としていました。しばらく様子を見てみると、親鳥が餌を運んでいるのを確認できました。親子を刺激しないように、6年3組全員で、教室の中から見守ることになりました。雛に「ぽちゃまる」と名をつけ、みんなで見守っていました。

7月20日(月)、数羽のツバメたちが教室の周りをくるくると旋回している中、ぽちゃまるも飛び上がり、その輪に加わったのです。そして、他のツバメとの区別もつかなくなり、梅雨の合間の大空へ飛んでいきました。

手を尽くしたものの、儚く消えてしまった命もありました。それらの命を代表して、ぽちゃまるが逞しく巣立っていきました。6年3組に訪れた、約半月の心温まる物語です。小さな命を救おうと、必死になった彼と、ぽちゃまるの成長を一緒に見守った6年3組の子どもたちの胸には、他では得がたい、大切な学びがあったに違いありません。



天沼小の救急救命士、君はヒーローだ。